

聖書：第二サムエル記3章31～39節

説教：声をあげて泣くダビデ

1 暗殺されたアブネル

1) ヨアブの恨み

前回までのあらすじをふり返ります。イスラエルはダビデ家とサウル家との間で王座を巡って衝突しています。ある日、サウル家に忠実に仕えてきたアブネル將軍は、ダビデこそがイスラエルの王となるべき人であると確信し、ダビデ側に寝返ります。ところが、ダビデ家の將軍であるヨアブが、アブネルを暗殺するという事件が起きてしまいます。ヨアブは、自分の弟アサエルがアブネルに殺されていた、その復讐でした。

これだけ見ると、ヨアブのやったことに少し同情したくなるかもしれません。しかし、ことはそれほど単純ではありません。事実はどうであったのか。アサエルがアブネルをしつこく追いかけてきたとき、アブネルは何度も警告しました。「追うのをやめて、ほかのところに行きなさい。もしおまえを殺すようなことになれば、自分はヨアブに対して顔向けができない。」けれども、アサエルは追いかけるのを止めようとしません。そこでやむなくアブネルはアサエルを殺さざるを得なかった。そういう事情がありました。ダビデの言葉でもわかるとおり、アブネルには非がありません。

2) 不信が渦巻く中で

アブネルはダビデを王とするために身を粉にして働きました。サウル派のグループに出向き、ダビデをイスラエルの王とするよう説得を繰り返します。その努力が稔り、じょ

じょに和解のムードが盛り上がって、さあこれからというときにアブネルが殺されてしまいます。

大変なことになりました。サウル派のグループは、ダビデがアブネルを殺させたのではないかと疑います。アブネルをだましたダビデは信用できない。緊張が高まり、全面戦争に突入する危険が高まっていきます。

すぐにダビデは自分はこの事件に関係していないと声明を出します。でも口だけでは誰も信用しません。ダビデは悩みます。

2 ダビデ

1) ヨアブとその仲間たちに対して

問題を乗り越えるために、二つの課題を解決しなければなりません。ヨアブを指導監督する立場にある者として、彼をどう処分するか。何もしなければ、アブネルをかばっているとみなされます。しかし、ダビデは「今は力が足りない」と感じており、ヨアブを完全にコントロールできない。でもそんなことは言い訳にできません。人々を納得させる処分を下す必要があります。それが一つ目の課題です。

二つ目。イスラエルの全国民がダビデを疑っています。そんな状態の中で、信頼を取り戻すためには、ヨアブを処分しただけでは納得してくれません。ダビデ自身が何かをしなければならぬ。これが二つ目の課題です。

まず一つ目を見ます。31節。「ダビデはヨアブと彼とともにいたすべての民に言った。「あなたがたの着物を裂き、荒布をまとい、

「アブネルの前でいたみ悲しみなさい。」当時、喪に服していることを現すために、人々は着物を裂き、荒布をまとうという習慣がありました。ダビデは、この暗殺事件を起こしたリーダーとそのメンバーたちに、アブネルの死を悼み、葬儀に参列しなさいと命じます。ヨアブにしたら、自分の弟を殺した者の葬儀です。そんなものに出たくはありません。ほかの人々の目も気になります。できるならほとぼりが冷めるまで、雲隠れしていたい気持ちです。

しかしダビデはそれを許しません。喪に服している姿で葬儀に出席させます。ヨアブが自分のしたことを後悔している。そのような印象を公に示すことを意図したのだろうと考えられます。もちろん、ヨアブの本心はちがいます。形だけ後悔しているそぶりをしたに過ぎません。とにかく、それでもイスラエルの人たちを納得させるためにはそうする必要がありました。

2) 民の前で

今の時代でも、これと似たようなことが起きます。そんなとき、組織の指導者はたいていこんな言い訳をします。「事件は、部下が個人的に起こしたことであって、自分はまったく知らなかった。今後は、再発防止に努めてまいります。」一応謝るそぶりをするのですが、結局誰も責任をとることなく、問題の幕引きをはかろうとします。

ダビデはどうしたか。32節。「彼らはアブネルをヘブロンに葬った。王はアブネルの墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた。」ヘブロンは、ダビデが住んでいた町です。アブネルはかつてダビデと敵という立場にありましたが、いまダビデの友という扱いを受けて

葬られます。それも国葬という取り扱いをして、最大限の敬意を払います。

それだけではありません。ダビデはアブネルの墓の前で声をあげて泣きました。ダビデは王様です。リーダーです。リーダーがこんな姿をさらすべきでしょうか。今の時代、リーダーシップを研究している人たちは口をそろえて言います。「リーダーは必要以上に感情を表に出すべきではない。声をあげて泣くなどもつてのほか。そのような取り乱した姿を人々に見せたら、信頼を失ってしまう。リーダーはどんなときにも節度をもって感情をコントロールしなければならない。」そうしますと、現代のリーダーシップ論から見ると、ダビデはあきらかにリーダー失格となります。

しかし聖書には何と書いているか。36、37節。「民はみな、それを認めて、それでよいと思った。王のしたことはすべて、民を満足させた。それで民はみな、すなわち、全イスラエルは、その日、ネルの子アブネルを殺したのは、王から出たことではないことを知った。」

「ダビデは信用がならない。もう戦争しかない。」そんなふうになんかの思いが冷たくなっていく時、ダビデはなんとか危機を脱していきます。いやそんな消極的なことではありません。このことをきっかけに、ダビデに多くの信頼を寄せられるようになり、彼こそイスラエルの王にふさわしい人物であるとみなされるようにさえます。

何が幸いでしたのでしょうか。部下のヨアブを厳しく指導する、国を挙げて葬儀を執り行う。すばらしい弔辞を読む。断食をする。どれも大切であったでしょう。でもそのなかでも、ダビデ自ら悲しむ姿を全国民の目にさら

していったことが、大きかったように思います。口で語ったことばではなく、ダビデが泣く姿を見たとき、初めて人々は納得しました。「ダビデは、この事件に関して何も関与していない。ヨアブが独断でやったことだった。」

それでも疑い深い人はこう言うでしょうか。「ダビデは役者だったのだ。うまく演技して人々の心をつかんでいった。」ダビデはそんなことをする人ではありません。もしそうであったとしても、演技であるかどうか見ればわかるのではないですか。昔、ある女性アイドル歌手は嘘泣きが上手であったと言われたそうです。嘘泣きとは、涙を流しながら陰では舌をぺろりと出すことです。嘘なのか本当なのか、見る人が見たらすぐにわかります。演技した嘘泣きで心を動かすことはできません。

ダビデは心から悲しみ、涙を流しました。その姿を、人々の前に隠すことなく、さらけだしていきます。

3 主の姿

1) 死んだ者のために声をあげて泣く

ダビデとアブネルを通して神ご自身の姿が浮かび上がってきます。

主イエス・キリストが私たちのところに来られたとき、この方が罪のない方であるとは誰も思いませんでした。むしろ、この方に罪をかぶらせ、罪を押しつけ、そうやって無理矢理に十字架に追いやっていきます。主はどのようにしてご自分に罪がないことをお示しになったのでしょうか。「わたしには罪はありません。わたしは潔白です。」そのようなことはひとことも言いません。その代わり、主はこうされます。

ヨハネの福音書 11 章に、マルタとマリヤ

の兄弟ラザロが死んだとき、イエスは涙を流されたとあります。マルタとマリヤ、そして村中の人たちがラザロが死んだことを悲しんでいる、そのことをご覧になってイエスも一緒に泣きました。それを見ていたユダヤ人たちはこう言います。「ご覧なさい。主がどんなに彼を愛しておられたことか。」

自分には罪がないと言い張るようなことはなさいません。その代わりに罪に苦しむ者のために涙を流して、一緒に悲しみます。罪のない方が罪ある私たちを、そんなふうにして愛して下さっている。主ご自身、言葉だけではなく、低くなられる姿で示して下さいました。その姿を見て、人は初めてこの方には罪がないのだと知らされました。

ときどき、人の目を気にしたり、評判を気にして、ああすべきであるとか、こうすべきでない気に病むことがあります。でも、人の目が大切なわけではありません。主の前を誠実に歩んでいるのかどうか、結局そこではないでしょうか。本当の自分を主にそのまま示していただくだけです。人の目には恥ずかしく見える事かもしれません。弱々しく見える事かもしれません。でも、それでよいのです。本当の心を隠すことなく主の前に注ぎだしているのか。主はそこに目を留めておられます。

もしそのようにして歩むのなら、必ず真実があきらかになります。主がそのお手本を示して下さいました。やがて人も理解してくれるようになります。

ダビデのことを見ながら、主の前を歩ませてもらいたいと願います。